慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	陸氏毛詩草木鳥獸虫魚疏の基礎的研究 : 篇目から見る各本の相違
Sub Title	The edition research of Mao Shi Cao Mu Niao Shou Choug Yu Shu by Lu shi : by the contrast between chapter titles
Author	矢島, 明希子(Yajima, Akiko)
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	2015
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.50 (2015.) ,p.415- 444
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	山本英史前文庫長・川上新一郎教授退職記念
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-20150000-0415

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

陸氏毛詩草木鳥獸虫魚疏の基礎的研究

―篇目から見る各本の相違

矢島　明希子

はじめに

中国の学問において、詩経は基本的な経典である。古代、その注釈は、主に斉詩・韓詩・魯詩・毛詩があったとされるが、僅かな佚文を除けば、現存するのは毛詩のみとなった。孔子は、論語・陽貨篇において、詩を学ぶ理由のひとつに「多識於鳥獸草木之名」を挙げており、詩経に詠われた動植物の名物学は詩注の主要なジャンルとして継承され[1]、訓詁学や名物学は詩注から発展したとされる[2]。陸氏の毛詩草木鳥獸虫魚疏（以下、本書あるいは陸疏）は、動植物に特化した詩注の先駆的文献であり、名物学はもちろん本草学的にも意義が大きい。そこで、筆者は、景印叢書を除く在日刊本を調査し、以下の二十本を確認した。

（a）毛詩草木鳥獸虫魚（重較説郛）
（b）毛詩草木鳥獸虫魚（唐宋叢書）
（c）毛詩草木鳥獸虫魚（続百川学海）
（d）刻毛詩草木鳥獸虫魚疏（亦政堂鐫陳眉公普秘笈集）
（e）草木鳥獸虫魚疏（宝顔堂秘笈普集）
（f）陸元恪草木虫魚疏（塩邑志林）
（g）毛詩草木鳥獸虫魚疏広要（津逮秘書）
（h）毛詩草木鳥獸虫魚疏広要（学津討原）
（i）毛詩草木鳥獸虫魚疏（古経解彙函）

（j）毛詩草木鳥獸虫魚（頤志齋叢書）
（k）毛詩草木鳥獸虫魚（経学輯要）
（l）毛詩草木鳥獸虫魚疏（乾隆五十七刊増訂漢魏叢書）
（m）毛詩草木鳥獸虫魚疏（光緒二刊増訂漢魏叢書）
（n）毛詩草木鳥獸虫魚疏（光緒六刊増訂漢魏叢書）
（o）毛詩草木鳥獸虫魚疏（光緒二〇刊増訂漢魏叢書）
（p）毛詩草木鳥獸虫魚疏（光緒二十一刊増訂漢魏叢書）
（q）毛詩草木鳥獸虫魚疏校正（聚学軒叢書）
（r）毛詩草木鳥獸虫魚（四庫全書）
（s）草木疏校正（白鷺洲書院刊）
（t）毛詩艸木鳥獸虫魚疏（羅振玉刊）

これらの多くが叢書中に収められた本であり、単刊とみられるのは（s）白鷺洲書院本、（t）羅振玉校本のみである。

現在伝わる陸疏は、毛詩正義などに引かれた佚文を集成した書とされ、伝本によって異同が多い。本書は詩経研究及び本草学・訓詁学の基本文献であり、歴史研究の観点から見ても、動植物など周囲の環境に関する知識の継承を研究する上で欠かせない文献であるが、各本の特徴について整理されていないのが現状である。したがって、拙稿ではまず各本の篇目を整理することでそれぞれの特徴を把握し、陸疏刊行の全体像をつかむことを目的とする。[3]

一．陸疏の内容と撰者

（一）内容と形式

陸疏は、毛詩に登場する動植物に関する詳細な記述を持ち、本草学に近い要素を多分に含んでいる。[4]例えば、重較説郛本の第一篇を挙げてみよう。

方秉蘭兮

蘭即蘭香草也。春秋傳曰、刈蘭而卒。楚辭曰、紉秋蘭。孔子曰、蘭當爲王者。香草皆是也。其莖葉似藥草澤蘭、但廣而長節、節中赤、高四五尺。漢諸池苑及許昌宮中皆種之。可著粉中、故天子賜諸侯庄蘭、藏衣著書中辟白魚也。

篇題の「方秉蘭兮」は、毛詩・鄭風・溱洧の一句である。本文は毛詩に詠まれた草木鳥獸の異名を挙げ、その姿形や生息地・用途などを記録している。[5]上巻に草木、下巻に鳥獸魚虫を収め

る。各篇の字数は少ない篇で十三字（采荼薪樗）、多い篇では二百二十一字（有鱣有鮪）と篇ごとに情報量の差が大きい。各篇は草・木・鳥・獸・魚・虫の順に配列されるが、各類の中での配列は、篇題の出典である現行毛詩の配列とは無関係であり、規則性を見いだすことは難しい（末尾表参照）。

（二）撰者と成立年代

現在、本書の撰者及びその年代は、三国呉の陸璣の撰によるものとする見方が優勢である。しかし、先に挙げた陸疏のうち、最も編纂が古い元・陶宗儀編（重較）説郛所収本は「唐陸璣撰」とする。ただ、陸疏と見られる書目はすでに隋書・経籍志に、

毛詩草木蟲魚疏二卷　烏程令呉郡陸璣撰

と見え、唐人の撰とするには矛盾する。唐宋の書目解題も説が分かれる。

・経典釈文・序録（唐・陸徳明）

陸璣毛詩草木鳥獸蟲魚疏二卷、字元恪、呉郡人、呉太子中庶子、烏程令。

・崇文總目

毛詩草木鳥獸蟲魚疏二卷

原釋呉太子中庶子烏程令陸璣撰。世或以璣爲機非也。機自爲晉人、本不治詩。今應以璣爲正。然書但附詩釋詁、窘于采獲、似非通儒者所爲者。將後世失傳不得其眞歟。

・直斎書録解題（南宋・陳振孫）

毛詩鳥獸草木蟲魚疏二卷

題呉郡庶子陸璣撰。案館閣書目稱呉中庶子烏程令、字元恪、呉郡人、據陸氏釋文也。其名從玉、固非晉之士衡、而其書引郭璞注爾雅、則當在郭之後、亦未必爲呉時人也。孔疏呂記多引之。

経典釈文及び崇文總目は三国呉の人物とするが、直斎書録解題は、本書が爾雅の郭璞注を引いていることを根拠に、郭璞（二七六-三二四）以降の人物とする。[6]

もう一つは、陸氏の名が「璣」なのか「機」なのかという議論である。「機」であるとすれば、三国呉から西晋時代の文人・陸機（二六一-三〇三）が想定される。陸機は字士衡、三国呉の名門の生まれで、呉が滅ぼされた後上洛し、博物志などを著した張華と交流を持っていることから、[7]博物学的内容を持つ陸疏の撰者と考えられたとしても不思議ではない。しかし、陸士衡説を否定する論者は、崇文總目に「機自爲晉人、本不治詩」

とあるように、陸士衡が毛詩に注釈したという伝記が残されていないことをその根拠とする。一方、陸元恪なる人物には何の伝記も伝わっておらず、こちらも直接的な手がかりはない。

この問題について、小林清市氏は引書やその内容的特徴などから詳細に検討している。小林氏によると、陸疏の引書あるいは人物の中では「魏博士濟陰周元明」と「神農本草経」が最も新しい時代に属し、晋及びそれ以降のものは全くなく、内容的特徴からしても魏晋から後魏の詩注と類似しているという。そして、最終的に小林氏は以下のように仮定する。

陸疏の成立はあるいは郭璞、崔豹に先んずる時代に仮定され得ないだろうか。隋書・経籍志に撰人不記の「毛詩義疏」が複数記載されていること、斉民要術の引用に際しては「陸機」も「草木」の名もなくすべて「詩義疏」「詩疏」の名であること、孔疏、経典釈文以降始めて「陸機疏」「草木疏」の名が定着したことは陸疏の匿名性を表している。陸元恪なる人の実在を疑う根拠はないが、かかる状況から現存の陸疏は複数の手によって記され、後に陸機の名を託されたと考えるのが自然だろう。複数の手になるものなら、あるいは成立期の詮索は無意味かもしれない。敢えて郭璞以前に拘泥するのは、陸疏中に淘汰されずに残る奇談怪説の類が郭璞の諸注では払拭され、より精緻な観察眼を持つに至っている点を重視するためである。

これらのことから、本書の成立が非常に不明確であることがわかる。[8] 手がかりが少ないため、拙稿ではこの問題に深入りするのは避けたい。書誌学的に見ると、本書の撰者とその年代の表記には、①呉・陸璣、②呉・陸機、③唐・陸璣の三種が存在する。上記の各本を分類すると以下のようになる。

①呉・陸璣

（f）塩邑志林本、（j）頤志齋叢書本、（i）古経解彙函本、（k）経学輯要本、（l）～（p）増訂漢魏叢書本、（q）聚学軒叢書本、（s）白鷺洲書院本

②呉・陸機

（t）羅振玉校本

③唐・陸璣

（a）重較説郛本、（b）唐宋叢書本、（c）続百川学海本、（d）亦政堂鐫陳眉公普秘笈集本、（e）宝顔堂秘笈普集本、（g）津逮秘書本、（h）学津討原本

各本の刊行年代については以下に述べるが、重較説郛など明

版のほとんどが③唐・陸璣説を採り、清代になると①呉・陸璣説が優勢となったようだ。

二　各校本について

校者ごとに各本の書誌情報及び特徴を概述する。校者によって分類する理由は、その校訂によって収録篇数や編成が異なるためである。

（一）重較説郛本（章斐然校）

（a）毛詩草木鳥獸蟲魚二巻　唐陸璣撰〔明〕〔章斐然〕校　重較説郛（元陶宗儀撰）所収　宛委山堂蔵板　清順治四年（一六四七）序刊〈東洋文庫：V-5-A-11〉

（b）同　唐宋叢書（明鍾人傑等編）所収　経徳堂蔵板〈東洋文庫：V-5-A-5〉

（c）同　續百川學海　甲集（明呉永編）所収〈東洋文庫：V-5-A-34〉

左右双辺（十九・〇×十三・〇）、有界、毎半葉九行二〇字、まれに注あり小字双行、版心白口単黒魚尾

（a）重較説郛本・（b）続百川学海本・（c）唐宋叢書本は同版である。ただ、東洋文庫所蔵の続百川学海本には「唐呉郡陸璣撰」という撰者名の下に「章斐然校」と校者を刻すのに対して、同所蔵の唐宋叢書本と重較説郛本では校者名及び尾題を欠く。倉田淳之介氏は、説郛の版本研究の中でこれら三叢書の関係に言及し、続百川学海や唐宋叢書の版が万暦末から天啓初に書肆を中心とした編纂事業によって行われ、重較説郛はさらにこれらの版を吸収して刊刻されたとする。確かに、東洋文庫所蔵の三叢書所収陸疏を比較すると、続百川学海本が早印のようで、巻首の校者名と尾題があることから初印本と見られる。これらが同所蔵の唐宋叢書本と重較説郛本では削除されており、少なくとも同所蔵の三本は、続百川学海本、唐宋叢書本、重較説郛本の順で印行されたと考えられる。しかし、京都大学人文科学研究所（以下、人文研）所蔵の三本を比較すると、続百川学海本〈人文研：叢-I-2-30〉には校者と尾題を削除した版が用いられ、重較説郛本〈人文研：叢-I-1-6〉より後印、唐宋叢書本〈人文研：叢-I-2-33〉とは同時期の印行と見受けられた。つまり、これら三叢書は、万暦末から天啓初にかけて初印の版が刊行され、その後に校者を削るなどの修を施し数次にわたって印行されたものと推測される。

以上の三叢書に流用された版について、ひとまず、その編纂時期が最も早い説郛の名を代表として、重較説郛本と呼ぶ。

（二）姚士麟校本

（d）刻毛詩草木鳥獸蟲魚疏二卷　唐陸璣撰　明姚士麟・沈啟先等校　亦政堂鐫陳眉公普秘笈集（明陳繼儒輯）所収　明泰昌元年（一六二〇）序刊〈内閣文庫：370-52/2〉

四周単辺（十九・七×十二・三）有界、毎半葉八行十八字、まれに注あり小字双行、版心白口魚尾なし

【重刻】

（e）草木鳥獸蟲魚疏二卷　唐陸璣撰　明姚士麟・沈啟先等校　寶顔堂秘笈普集所収　民国十一年（一九二二）文明書局石印〈慶應義塾大学：1005-806-8〉

四周双辺（十六・二×一〇・一）有界、毎半葉十六行三十六字、句点有り、まれに注あり小字双行、版心白口単黒魚尾

（f）陸元恪草木蟲魚疏二卷　呉陸璣撰　明姚士麟・鄭端胤・劉祖鍾校　塩邑志林（明樊維城輯）所収　明天啓三年（一六二三）序刊〈東洋文庫：XI/3-A-7/7〉[10]

左右双辺（二〇・〇×一三・九）有界、毎半葉一〇行十九字、まれに注あり小字双行、版心白口単黒魚尾

姚士麟は明末浙江嘉興府海塩の蔵書家であり、同学の胡震亨と共に多くの書物を校勘・編纂したことで知られる。これら三本は、ともに姚士麟を校者の筆頭に挙げているが、（d・e）陳眉公普秘笈集本と（f）塩邑志林本では校訂の内容が異なる。これについては、第三章で詳しく述べる。

まず、亦政堂鐫陳眉公普秘笈集（以下、明刊普秘笈）は明末の代表的な文人の一人であり出版事業者である陳継儒（号は眉公、室名は宝顔堂）が編纂したとされる叢書である。秘笈シリーズには普集の他に、正・続・広集などから成り、万暦年間より浙江嘉興府秀水の沈徳先・沈孚先兄弟によって刊行された[11]。明刊秘笈に冠された「亦政堂」や「尚白齋」は、沈兄弟の室名である。校者に併記される沈啟先も沈兄弟の親類であろう。姚士麟は、尚白齋鐫陳眉公宝顔堂秘笈に序を寄せており、沈兄弟と交流があったことがうかがえる[12]。民国に刊行された宝顔堂秘笈普集は、この重刻である。

一方の塩邑志林本は、本書の校者として姚士麟の他、鄭端胤・劉祖鍾という名が連なる別本である。塩邑志林は、海塩県知の

樊維城によって編纂された郡邑叢書で、朱国祚の序文によれば、姚士麟・胡震亨が筆を執り、鄭茂才・劉祖鍾が秘本を供出し支援したという。[13] つまり、明刊普秘笈本と塩邑志林本は、浙江嘉興府の海塩と秀水という隣接地域において、ほぼ同時期に、同じ校者の名を掲げ、異なる版によって出版されたことになる。

姚士麟は、本書の校訂について自著の見只編（塩邑志林所収）上巻に以下のように記述している。

余筐中有毛詩艸木蟲魚疏一卷、題曰呉太子中庶子烏程令呉郡陸璣元恪撰。陳氏書録解題謂此書多引郭氏、似非呉人。余謂陳氏所見、特邢昺疏後抄出以備一種者耳。若余所藏、則艸之類五十、木之類三十有四、鳥之類二十有三、獸之類九、魚之類十、蟲之類十有八、未嘗一條引及郭氏者。余備檢爾雅、木槿紅蕷茁栵栁碩鼠諸條有引及郭氏者、然其語意似皆疏人互引、抄者混入之耳。且余本後有魯齊韓毛四詩授受、與漢書儒林傳相爲表裏。

この記述から、姚士麟は陸疏に郭璞の引用があるとする説には否定的であることがわかる。塩邑志林本は撰者名を明記せず、叢書の総目録では本書を三国呉時代の著作とする。一方、明刊普秘笈本は巻頭にて撰者を「唐呉郡陸璣元恪撰」としている。このことから、両本が等しく姚士麟の校を経たとは考えにくい。[14] ただ、少なくとも塩邑志林本の方が姚士麟の校勘を反映しているといえよう。

（三）毛晋広要本

（g）毛詩草木鳥獸蟲魚疏廣要四卷　唐陸璣撰　明毛晋校注

津逮秘書（明毛晋編）所収　明汲古閣刊〈内閣文庫：237-248〉

左右双辺（十九・〇×十三・二）、有界、毎半葉九行十九字、本文中まれに校注あり小字双行、各篇尾に案語を附す（一格低）、版心白口魚尾なし

【重刻】

（h）毛詩草木鳥獸蟲魚疏廣要四卷　唐陸璣撰　明毛晋校

注　清張海鵬校　学津討原（清張海鵬編）所収　清嘉慶十一年（一八〇六）序　照曠閣刊〈内閣文庫：371-33〉

左右双辺（十九・一×十三・〇）、有界、毎半葉九行二十一字、本文中まれに注あり小字双行、各篇尾に案語を附す（一格低）、版心線黒口魚尾無し

（g）毛晋広要本は、明末蘇州常熟の大蔵書家である毛晋自ら長大な注を附し編纂・出版した本で、先行本の上下巻をさらに上下に二分し全四巻とする。毛晋は崇禎十二年（一六三九）の自序で次のように述べている。

陸璣草木鳥獸蟲魚疏一書、向来傳播詩人之耳、聲若震霆、思一見而不可得。余乍得而鼓掌、曰……可以盪目遨魂、披發吾十年聾瞽。及展卷讀之、堦前梧影未移、而卷帙已告竣矣。嗚呼、昔人所謂窘于採擇……况相傳日久、愈失其真。……時余方訂正十三經注疏、於詩經尤不敢釋手、遂因陸氏所編若干題目、繕寫本文、旁通爾雅郭鄭諸子暨有補經學之書、芟其蕪穢、潤其簡略、正其淆訛、又叅之確開的見、自戸庭以及山巔水湄平疇異域。凡植者浮者飛者走者鳴而躍者潛伏而變化者、無不蒐列、命之曰廣要。更有陸氏所未載、如葛桃燕鵲之類、循本經之章次而補遺焉。

毛晋は十三経注疏の校訂を行う中で陸疏にも校訂を施し、篇目を増補したと述べる。校合対象について、改訂した篇の校注には「舊本」「坊刻」「向刻」としか注記がないため、毛晋がどのような本を参照したのかは不明だが、当時すでに重較説郛本・姚士麟校本が刊行されていたと考えられ、特に姚士麟等校本は地域的に毛晋が拠点とする常熟と近接していることから、毛晋がこれらを手にしていなかったとは考えがたい[15]。

（h）学津討原は、同郷常熟の張海鵬が津逮秘書所収毛晋広要本を重刻した本である。この末尾には、「多識／於鳥／獸草／木之名」という論語の一句を印文とした印が刻まれ、本書の性格を端的に表している。

これまで、重較説郛本や姚士麟校本には注釈や校語の類はほとんど見られなかったが、毛晋はすべての篇に詳細な注釈を施しており、これ以降、校者の注を附した版が現れる。

（四）趙佑校正本

（s）**草木疏校正二卷**〔**呉陸璣撰**〕**清趙佑校注　清丁杰覆校**

乾隆五十六年（**一七九一**）**跋　白鷺洲書院石印**〈東大総合：B60-759〉

四周双辺（二〇・五×十三・六）、有界、毎半葉九行二〇字、注あり小字双行、句点あり、篇尾に案語を附す（一格低）、版心白口単黒魚尾

【重刻】

（q）**毛詩草木鳥獸蟲魚疏校正二卷**〔**呉陸璣撰**〕**清趙佑**

撰注　清丁杰覆校　乾隆五十六年（一七九一）跋　聚学軒叢書（清劉世珩編校）所収　光緒刊〈東洋文庫：V-5-B-165〉

左右双辺（十五・九×十一・九）、有界、毎半葉十一行二十一字、注あり小字双行、篇尾に案語を附す（一格低）、版心粗黒口双黒魚尾（対向）

（s）白鷺洲書院本は、本文中に小字双行で校注や典拠を附し、多くの篇の末尾に趙佑（浙江仁和の人、号は鹿泉）の案語を附す。趙佑の乾隆四十四年（一七七九）自序によれば、

陸璣毛詩草木鳥獸蟲魚疏二巻、元陶宗儀載在説郛、及明末毛晉爲之廣要、入津逮秘書。今世現行、唯此二本。以校陸德明・孔穎達・邢昺・鄭樵・羅願衆家所引、皆具其中。有引未及盡者、可藉以補其闕、正其譌。亦有明見諸引而此亡之、蓋非完書。陶本舛錯脱棄特多、毛本較善、然於陶本之失、仍未能悉加釐正也。

と、当時、本書は重較説郛本と毛晉広要本の二本のみで、どちらも完全ではなく、特に重較説郛本は誤脱が多いことを指摘する。本書の校訂については、

又過(ママ)爰取二本異同、校以諸家別錄而是正之。凡應改定題目、増訂文字、可疑之處、悉附見於本文中、率以詩爾雅疏釋文爲之主、並繫之案。至毛氏所論得失、自有廣要在、如唐棣常棣、已與予詩細適合、不暇復論、間有贅及、讀者亦可覽而知所裁也。

とし、本文中に重較説郛本や毛晉広要本など先行刊本及び詩疏や爾雅疏などとの校合注を挟み、各篇の尾に案語を附す毛晉広要本と同様の形式を取る。王謨は、増訂漢魏叢書に収録した本書に対する識語の中で、趙佑校本について「大宗師仁和趙鹿泉先生著述、最富于毛詩学用功尤深」と評価している。

また、趙佑は乾隆五十四年から五十七年に学政として江西に赴任しており、[16]在任中である乾隆五十六年（一七九一）の跋文によれば、江西の白鷺洲書院で丁杰（号は小山）が校点した別鈔本によって、本書を覆校している。[17]

湖州丁進士杰小山、篤志古學、勤於考訂。嘗從明續百川學海中、錄出陸氏詩疏、詳加校讐。亦不遺毛氏廣要本、爲之補正缺謬。……當己亥序校正時、君方在京、已有成編而未相識也。比己酉來豫章、九月廿五日、小山自歙來投翁覃溪、適覃溪與予交代、已成行、予乃款之院東軒。行李無多、所携新舊書籍種數特夥、言動甚恪愿……小山見予舊著經説各

種、尤以陸疏校正與其所輯多相入者、携去別鈔一本、加點勘焉、分綴硃墨於其上、所以爲予益者甚勤。蓋予爲是稿、初僅數月畢功、良不無疎略、惟宛彼鳴鳩條、嘗經孫侍御志祖頤谷爲予稍一參證、既收之、以志朋友之善。又于役南北、無暇覆詳、藉小山力、居然適願。即此可見小山之學之博、意之誠、與頤谷皆非苟雷同、故今復就所綴、別以丁云補見各條中、屬外甥陳震亨、合鈔存之而識處尾、自可與丁君之書各不相揜也。[18]

（五）石永齡校本

（l）毛詩草木鳥獸蟲魚疏二巻　呉陸璣撰　石永齡校　清王謨識　増訂漢魏叢書（清王謨編）八十六種本所収　清乾隆五十七（一七九二）年　愛日堂刊〈慶應義塾：48/16/1〉

左右双辺（十八・九×十三・三）、有界、毎半葉九行二〇字、版心白口単黒魚尾

【重刻】

（m）毛詩草木鳥獸蟲魚疏二巻　呉陸璣撰　清石永齡校　増訂漢魏叢書（〔清〕〔王謨〕編）八十六種本所収　清光緒二年（一八七六）紅杏山房蔵板　民国四年（一九一五）四川盧樹柟梓卿補修〈東洋文庫：E/5-B/0001〉

四周双辺（十八・四×十三・五）、有界、毎半葉九行二〇字、版心白口単白魚尾（ところどころ黒魚尾）

（n）毛詩草木鳥獸蟲魚疏二巻　呉陸璣撰　清石永齡校　増訂漢魏叢書（〔清〕〔王謨〕編）九十種本所収　光緒六（一八八〇）年　練江三餘堂蔵板汪氏述古山莊刊〈東大総合：A30-37〉

四周単辺（九・〇×六・七）、無界、毎半葉一〇行二〇字、版心白口単黒魚尾

（p）毛詩草木鳥獸蟲魚疏二巻　呉陸璣撰　清石永齡校　清王謨識　増訂漢魏叢書（〔清〕〔王謨〕編）九十六種本所収　光緒二十一（一八九五）年　石印〈慶應義塾：79/40/3〉

四周単辺（十五・九×一〇・七）、有界、毎半葉二十四行六〇字、版心下象鼻のみ線黒口単黒魚尾

これらは、巻首に校者として「瀘溪石永齡校」の名を刻す。この人物は「増訂漢魏叢書参閲姓氏」の同学の項に「石永齡介夫〈瀘溪〉」と列挙されているが、詳細は不明。[19]

増訂漢魏叢書の重刻本には、この他（o）光緒二〇年刊本があ

るが、これは丁晏校序を附すため、ひとまず丁晏校本として扱う。ただ、篇目を比較して見ると、丁晏校本とも異なる。これについては、後で検討したい。

増訂漢魏叢書を編纂した王謨は、本書の末尾に以下のような識語を附す[20]。

右毛詩草木鳥獸蟲魚疏二卷、見經典釋文、云吳大子中庶子鳥程令陸璣撰。璣字元恪、吳郡人。隋志及通志藝文略俱題作陸機、非也。書流傳甚古、自釋文及孔氏詩疏・邢昺爾雅疏、時時引證。元陶宗儀始采入説郛、明毛子晉更爲詩疏廣要刊入津逮秘書中、而何氏漢魏叢書反棄不收。今本蓋從唐宋叢書采補、仍陶本也。據經義考、姚士粦言所藏陸氏疏本、凡草之類八十、木之類三十有四、鳥之類二十有三、獸之類九、魚之類十、蟲之類十有八。檢今本數皆不符、又不知姚氏所據何本。此書向未見有單行善本。今江右大宗師仁和趙鹿泉先生著述最富、于毛詩學用功尤深、既著有詩細、又校正此疏、參合陶氏説郛・毛氏廣要二本、并取釋文及孔邢二疏所引、句櫛字比、加以案斷、至精至詳、然後此書得稱完善。簡出書藁、屬湖洲丁進士杰小山覆校、丁君遂爲雕板吉安白鷺洲書院。謨因問請頒發學官、廣爲流布、以嘉惠土子(ママ)先生意、更不以爲可、然學者而欲多識於鳥獸草木之名、則於是書不可不知所宗倘(ママ)也。汝上王謨識。

王謨は、先行刊本について述べ、今本は唐宋叢書本（すなわち重較説郛本）によったとする。確かに、（l）と（m）は、重較説郛本と体式及び字様がよく似ている。王謨は序文で、朱彝尊の経義考が「姚士粦言」として示す篇目の数と今本の数とが符合しないことを指摘する[21]。引用のとおりの篇数であるとすれば、姚士麟蔵本は計百七十四目ということになり、現行の刊本の中で最多の篇数を持つことになる。しかし、前掲姚士麟著見只編で「艸之類五十」とするところを朱彝尊は「草之類八十」に作っており、朱彝尊の誤りだろう。

趙佑校本・石永齢校本は皆乾隆後期の序文があることから、明末以来、この時期に再び陸疏への関心が高まったと考えられる。

（六）四庫全書本

（r）毛詩草木鳥獸蟲魚疏二卷　吳陸璣撰　清左周校　清莫瞻菉覆校（台湾商務印書館刊景印文淵閣四庫全書に拠るため、体式は略す）

四庫全書提要（乾隆四十六年）は、呉人陸璣説を採る根拠に、

本書が隋志に見えること、郭璞の注と明記した箇所が全くないことなどを挙げ、以下のように述べる。

又毛晉津逮祕書所刻、授陳振孫之言、謂其書引爾雅郭璞注、當在郭後、未必呉人。因而題曰唐陸璣。夫唐代之書、隋志烏能著錄。且書中所引爾雅注、僅及漢犍爲文學樊光、實無一字涉郭璞、不知陳氏何以云然。姚士粦跋已辨之。或（毛）晉未見士粦跋歟。原本久佚、此本不知何人所輯。大抵從詩正義中錄出。

提要は、本書の撰者について姚士麟の説を採る。管見のかぎり、現存する陸疏に姚士麟の跋文を附すものはないが、おそらく前述した見只編の一節を指すものだろう。また、本書に現れる地名を考証し、

似乎諸家傳寫又有所竄亂、非盡原文。然勘驗諸書所引、一一符合、要非依託之本也。……蟲魚草木、今昔異名。年代迢遙、傳疑彌甚。璣去古未遠、所言猶不甚失眞。詩正義全用其說、陳啓源作毛詩稽古編、其駮正諸家、亦多以璣說爲據。講多識之學者、固當以此爲最古焉。

と、本書の成立や校勘に疑問を呈しながらも、詩注の基本文献として一応の価値を認めている。

また、提要は毛晉の毛詩草木鳥獸虫魚疏広要について、

採摭既多、故異同滋甚。辨難考訂、其說不能不長也。其中如南山有臺一條、則引韻書證其佚脫。有集維鵲一條、則引詩緝證其同異。其考訂亦頗不苟。至於嗜異貪多、每傷支蔓。……蔓延及於石刻、於經義渉無所關。核以詁經之古法、殊乖體例。然雖傷冗碎、究勝空疎。明季說詩之家、往往簸弄聰明、變聖經爲小品、晉獨言言徵實、固宜過而存之。

と、毛晉の考証が冗長で核心から乖離していると批判する。このような批判は明代の類書に対しても見られ[22]、成立の曖昧な本書に、さらに膨大な注を施した毛晉広要本にも同様の評価を下したといえよう。

（七）丁晏校本

（j）毛詩草木鳥獸蟲魚疏二巻　呉陸璣撰　咸豐五年（一八五五）清丁晏校序　頤志齋叢書（清丁晏撰）所収　同治元年（一八六二）刊　六藝堂藏版〈東洋文庫：V-2-146〉

左右双辺（十八・六×十二・九）、有界、毎半葉十二行二〇字、注あり小字双行、版心白口単黒魚尾

【重刻】

（i）**毛詩草木鳥獸蟲魚疏二巻　呉陸璣撰　咸豊五年（一八五五）清丁晏校序　古経解彙函第十五（清鍾謙鈞輯）所収　同治十三（一八七四）年序**〈慶應義塾：72-100-13〉

左右双辺（十八・〇×十三・三）、有界、毎半葉一〇行二十一字、注あり小字双行、版心白口単黒魚尾

（k）**毛詩草木鳥獸蟲魚疏二巻　呉陸璣撰　咸豊五年（一八五五）清丁晏校序　六藝堂校本　経学輯要巻七所収　光緒十三年（一八八七）　點石齋校印**〈慶應義塾：69-115-7〉

左右双辺（十三・〇×八・一）、有界、毎半葉二十四行五十五字、注あり小字双行、版心白口単黒魚尾

（o）**毛詩草木鳥獸蟲魚疏二巻　呉陸璣撰　咸豊五（一八五五）年清丁晏校序　清王謨識　増訂漢魏叢書（清王謨編）八十四種本所収　光緒二〇（一八九六）年　湖南藝文書局校刊**〈慶應義塾：79-12-10〉

左右双辺（十四・〇×九・四）、有界、毎半葉九行二〇字、版心白口単黒魚尾

丁晏は、清代江蘇山陽の人物で、堂号は頤志斎及び六芸堂である。本書の校勘について、咸豊五年（一八五五）の自序において以下のように述べる。

> 炳燭之明、手自讐校。考之詩疏釋文及唐宋類書、比勘是正。舊毛晉津逮秘書本・王謨漢魏叢書本、王本譌漏殊甚、脱去鹿鳴食野之芩疏、蒲蒻鶻鳩亦佚脱、今悉依毛刻本。毛脱去木瓜一條、据御覽引補入。訂其譌字、増其闕文。

これによれば、毛晉広要本や王謨の漢魏叢書本には遺漏が多いため、丁晏は唐や宋代の類書を用いて陸疏を校正し、太平御覧によってこれを補正したとする。そして、本文中に小字双行にて校注を挟む。

上記の四種のうち、（o）増訂漢魏叢書（光緒二〇）は丁晏の序文がついているものの、注釈を欠くうえ、篇目を比較しても他の丁晏校本とは異なる。したがって、増訂漢魏叢書（光緒二〇）は重刻であるとはいえない。これについては後に検討する。

（八）羅振玉校本

（t）**毛詩艸木鳥獸蟲魚疏二巻　〔呉〕陸機撰　清羅振玉校　光緒十二年（一八八六）序刊　上海聚珍倣宋印書局　排印**〈阪大総合：石濱-A-4〉

左右双辺（十五・八×一〇・二）、有界、毎半葉一〇行二十一字、注小字双行、版心線黒口単黒魚尾

羅振玉は、光緒十二年自序に、以下のように述べる。

兒學治詩、毛鄭外、兼受陸機毛詩草木鳥獸蟲魚疏。機生於三國、去古不遠、兩漢以来、先師古説略見於此。顧世鮮善本、近習見者、明毛晉陸疏広要本・國朝王謨漢魏叢書重刻説郛本、均紕繆觸目。山陽丁氏晏以二本不便學者、援據古籍、作陸疏校正二巻、譌文奪字、均有匡補、而淮別仍復錯出。……其餘淮別、亦略與毛王二本埒。玉爰以晷暇、不揣荒劣、糾諸經疏及書類書、凡所徵引、爲比量異同、刊補譌佚。彌月以来、匡訂數百處。其有顯然譌誤而古籍無徵引者、謹闕所疑、不敢馮肊擅改、以詒金根之譏。此疏舊本百三十三題、丁氏據齊民要術引増投我以木瓜一題、……今均爲改正、統得百四十有二題。

先行刊本として、毛晉広要本・漢魏叢書本・丁晏校本に言及している。漢魏叢書本について、「國朝王謨漢魏叢書重刻説郛本」としており、羅振玉は漢魏叢書本が重較説郛本の重刻であるとみている。おそらく、王謨の識語に「今本蓋從唐宋叢書采補仍陶本也」とあることに拠るだろう。

三　篇目の比較

以上の諸本をさらに収録篇目から整理していきたい。四庫全書提要が「原本久佚、此本不知何人所輯。大抵從詩正義中錄出」というように、本書は毛詩正義や爾雅註疏に「詩義疏」や「陸璣疏」として引かれる断片を収集した輯佚本とされる。そのため、本によっては収録篇数が異なる。特に清刊本では王謨や羅振玉がこれについて議論しており、篇目を比較することで各校本の系統が見えてくるのではないかと考えるものである。各校本の篇題を比較すると、篇題の字句を現行毛詩に一致するよう正す〈是正〉の他に、篇題となる詩句を差し替える〈差替〉、篇を新たに加える〈増補〉、篇題の詩句を補完する〈補完〉、篇の分割や統合あるいは配列を替える〈改編〉が見られる。これらについて、以下に検討する（末尾表参照）。

（一）重較説郛本系…重較説郛本・姚士麟校本・石永齡校本・四庫全書本

重較説郛本系は、草類四十八、木類三十一、鳥類二十二、獸

類七、魚類八、虫類十六の計百三十二篇目である。最も早期に刊行されたと考えられる重較説郛本（a・b・c）の篇目を基準に検討していきたい。

○姚士麟校本

姚士麟校本のうち普秘笈本（d・e）は、重較説郛本と同じ篇題、配列を取る。また、本文中の夾注も一致していることから、重較説郛本と普秘笈本が同系にあるといえる。

ただし、姚士麟校本の中でも、塩邑志林本は篇題に次のような異同がある。（以下、重較説郛本→検討対象本）

・菁菁者莪→青青者莪

・爰有樹檀→園有樹檀

・獻其貔皮→皮貔獻其

「園有樹檀」と「皮貔獻其」については、字形の類似による誤字とは考えがたい。特に、「皮貔獻其」では意味が通じない。版下を作る際の際の誤りとも想像される。

〈是正〉

・魚麗于留魴鯉→魚麗于留魴鱧

この篇について、塩邑志林本・毛晋広要本・趙祐校本・丁晏校本・羅振玉校本が「魚麗于留魴鱧」に作る。現行毛詩・小雅・魚麗に「魚麗于留鱨鯊。君子有酒、旨且多。魚麗于留魴鱧。君子有酒、多且旨」とあり、これによって「鱧」に作ったと推測される。

○石永齢校本

〈差替〉

・山有杻（小雅・南山有台）→隰有杻（唐風・山有樞）

毛詩正義が本篇の杻に関する内容を唐風・山有樞の疏が引用していることによる差替えだろう。年代順に見れば、この差替えはすでに毛晋によって行われている。石永齢校本は、一見、重較説郛本の重刻であるように見えるが、一部に校訂があることがわかる。

○四庫全書本

〈是正〉

・谷中有蓷→中谷有蓷

現行毛詩・王風は「中谷有蓷」に作り、毛晋広要本及び清代の各本も「中谷有蓷」を採る。

〈補完〉

・山有杻（小雅・南山有台）→北山有杻

現行毛詩・小雅・南山有台の詩句「南山有栲、北山有杻」に

従い「北」を補う。

以上、姚士麟校本・石永齢校本・四庫全書本は重較説郛本の篇目・配列を基礎に、現行毛詩に沿うよう一部を修正して継承したといえる。

（二）毛晋広要本系…津逮秘書・学津討原

津逮秘書・学津討原ともに草類四十九、木類三十一、鳥類二十二、獣類七、魚類八、虫類十六の計百三十三項目を収録する。

〈是正〉

・中谷有蓷・魚麗于罶魴鱧

これらは前述の通り。

・如鬼如蜮→爲鬼爲蜮（小雅・何人斯）

重較説郛本など先行諸本は「如鬼如蜮」に作る。しかし、現行毛詩に「如鬼如蜮」という詩句は見られず、おそらく小雅・何人斯の「爲鬼爲蜮」であろう。他本では趙佑校本・羅振玉校本が「爲鬼爲蜮」に作る。

〈差替〉

・山有枢（小雅・南山有台）→隰有枢（唐風・山有樞）

四庫全書本を除き、毛晋以降の諸本はすべて「隰有枢」を採る。

・集于苞杞（小雅・四牡）→無折我樹杞（鄭風・将仲子）

杞に関する篇について、重較説郛本系では篇題を「集于苞杞」としているが、毛晋広要本はこれを「無折我樹杞」に差替える。これも、毛詩正義が鄭風・将仲子「無折我樹杞」の疏に本篇の内容を引くことに拠ると推測される。趙祐校本・丁晏校本（光緒二〇年増訂漢魏叢書を除く）・羅振玉校本は毛晋に従い、「無折我樹杞」を採る。

・振鷺于飛（周頌・振鷺）→値其鷺羽（陳風・宛丘）

重較説郛本系では「振鷺于飛」に作る。本篇も上記の諸篇同様、毛詩正義が陳風・宛丘で本篇の内容を引くことに拠る差替えだろう。趙祐校本・丁晏校本（光緒二〇年増訂漢魏叢書を除く）・羅振玉校本は毛晋に従う。

〈増補〉

・食野之芩（小雅・鹿鳴）

毛晋は、この篇を同じく小雅・鹿鳴の詩句である「食野之蒿」の後に加える。出典が明記されないが、おそらく毛詩正義同篇が「陸機云、莖如釵股、葉如竹蔓。生澤中下地鹹處爲草貞實、牛馬亦喜食之」というのに拠ったか、あるいは現在伝わらない先行本に拠ったものだろう。他本では、趙祐校本及び羅振玉校

本が毛晋広要本と同じ編成を採り、丁晏校本は上巻の末尾に編綴している。

〈補完〉

・食鬱及薁→六月食鬱及薁（豳風・七月）

・鴟鴞→鴟鴞鴟鴞（豳風・鴟鴞）

・教猱升木→毋教猱升木（小雅・角弓）

・莎雞振羽→六月莎雞振羽（豳風・七月）

・螟蛉有子→螟蛉有子蜾蠃負之（小雅・小宛）

以上の篇について、毛晋広要本・趙佑校本・羅振玉校本は、それぞれ毛詩の句を補完する。このうち「螟蛉有子蜾蠃負之」は、この篇の本文に蜾蠃に関する記述を含んでいることによるか。[23]

以上のことから、毛晋広要本は、根拠が明らかでないものの、先行する版本の篇題を現行毛詩の詩句に沿うように改訂し、草類に「食野之蒿」を増補した版本といえる。津逮秘書は広く巷間に流布したとされており、[24]その後の校本が多く毛晋の校訂を採用している点から、清代の刊本に与えた影響は大きい。

（三）趙佑校本系…白鷺洲書院刊本・聚学軒叢書

草類五〇、木類三十二、鳥類二十二、獣類九、魚類八、虫類十六の計百三十七目を収録する。

〈是正〉中谷有蓷・魚麗于罶魴鱧・爲鬼爲蜮

〈差替〉隰有杻・無折我樹杞・値其鷺羽

〈補完〉六月食鬱及薁・六月莎雞振羽・螟蛉有子蜾蠃負之・毋教猱升木

以上の篇目はすべて毛晋広要本と同じ。

〈増補〉

・食野之芩

・浸彼苞蓄（曹風・下泉）

・野有死麕（召南・野有死麕）

・駉駉牡馬（魯頌・駉）

「浸彼苞蓄」以下、趙祐が新たに加えた項目には「補」を冠し、本文を一格低す。校注によれば、これらの出典に釈文を挙げる。[25]「浸彼苞蓄」は同じく毛詩・曹風・下泉の詩句である「浸彼苞稂」の後に、召南の「野有死麕」は召南・騶虞「于嗟乎騶虞」の後に、魯頌の「駉駉牡馬」は獣類の末尾に配列され、現行毛詩の篇列に従ったものと考えられる。

〈改編〉

・爰有樹檀（小雅・鶴鳴）→無折我樹檀（鄭風・将仲子）／隰有六駮（秦風・晨風）

「爰有樹檀」について、趙祐は「詩疏引爲無折我樹檀及隰有六駮疏」とし、詩疏を根拠にその内容を「無折我樹檀」と「隰有六駮」の二つに分けて立てるべきと指摘する。

趙祐は、序文で「元陶宗儀載在説郛、及明末毛晉爲之廣要、入津逮秘書。今世現行、唯此二本」と述べるように、重較説郛本と毛晉広要本によって校勘を行っており、基本的には毛晉広要本を採用している。各篇の末尾に案語を附す形式も、毛晉広要本とよく似た体裁を取る。そこへ、さらに数編を増補した点が趙佑校本の特徴である。

（四）丁晏校本系…頤志齋叢書・古経解彙函・経学輯要

これらは草類五〇、木類三十二、鳥類二十二、獣類九、魚類八、虫類十六の計百三十七目を収録する。

〈是正〉

・中谷有蓷・魚麗于罶魴鱧

これらは他本と同じである。

・言采其茆→薄采其茆（魯頌・泮水）

諸本は「言采其茆」に作るが、丁晏校本及び羅振玉校本は「薄采其茆」に作る。

〈差替〉隰有杻・無折我樹杞・値其鷺羽

「無折我樹杞」「値其鷺羽」について、丁晏は毛晉広要本に従って改めたと注す。

〈増補〉

・投我以木瓜

丁晏は「齊民要術種木瓜引御覽引、楙葉似榛、實如小甗瓜、上黄著中、令蚡香欲噉者、蜜封藏百日、食之也。案此條各本皆脱今補」と注し、斉民要術（巻四・種木瓜第四十二・注）及び太平御覽（果部十・木瓜・注）を典拠とする。[26]

・食野之芩・浸彼苞蓄・野有死麕・駉駉牡馬

丁晏は、これらの篇を各巻の末尾に配列している。「食野之芩」は毛晉広要本を典拠とし、「浸彼苞蓄」「野有死麕」「駉駉牡馬」は、趙佑校本と同じく釈文を出典とする。[27]ただ、管見の限り、丁晏校本において趙佑校本を参照した跡はうかがえない。

〈補完〉

・爰有樹檀→爰有樹檀　隰有六駮

丁晏は「案疏文補表題」と注し、「爰有樹檀　隰有六駮」と

並記する。「爰有樹檀」の本文に駁の内容を含んでいることは、すでに趙佑が指摘するところである。

〈改編〉

・弋鳧與鴈

他本は皆この篇を鳥類に配列するが、丁晏は増補した篇とともに下巻の末尾に配列する。

（o）光諸二〇年増訂漢魏叢書本は丁晏の序文を持つが[28]、丁晏注及び丁晏が増補した篇を採っておらず、先行する丁晏校本の重刻とはいいがたい。篇目数は、草類四十八、木類三十一、鳥類二十二、獸類七、魚類八、虫類十六の計百三十二項目であり、他の増訂漢魏叢書（石永齡校本）とまったく同じ編成である。しかし、石永齡校本と比べると、「中谷有蓷」「薄采其茆」「隰有杻」「魚麗于罶魴鱧」は丁晏校本と同じ篇題を採る。特に、「薄采其茆」の篇題を採る版本は丁晏以前には見られない。また、本文の異同も丁晏校本に近いため、丁晏校本を底本にしているが、体裁と篇目の編成は石永齡校本に倣った可能性が考えられる。

（五）羅振玉校本

草類五十二、木類三十三、鳥類二十四、獸類九、魚類八、虫類十六の計百四十二目を収録する。

〈是正〉中谷有蓷・魚麗于罶魴鱧・薄采其茆[29]・爲鬼爲蜮

〈差替〉無折我樹杞・隰有杻・値其鷺羽

〈増補〉食野之芩・浸彼苞蓍・投我以木瓜・野有死麕・駉駉牡馬

これらは先行刊本に従う。〈増補〉の「食野之芩」は毛晋広要本に拠り、「浸彼苞蓍」「投我以木瓜」「野有死麕」「駉駉牡馬」は丁晏校本に拠って補う。羅振玉はさらに以下の篇目を増補する。

・手如柔荑（衛風・碩人）

・四月秀葽（豳風・七月）

・隰有榆（唐風・山有樞）

・燕燕于飛（邶風・燕燕）

・鶉之奔奔（鄘風・鶉之奔奔）

羅振玉は出典に倭刻本玉燭宝典（手如柔荑・四月秀葽）、詩緝（隰有榆）、通志（燕燕于飛）、韻会（鶉之奔奔）を挙げる。先行の校訂が毛詩正義・経典釈文・太平御覧など基本的な経書・類書に拠るのに対し、多様な出典から採録している。

〈補完〉

・六月食鬱及薁・鴟鴞鴟鴞・六月莎雞振羽・螟蛉有子蜾蠃負之

これらは先行刊本と同じ。

・螽斯→螽斯羽（周南・螽斯）

各本は「螽斯」とするが、羅振玉は「各本無羽字、今補」として「羽」字を補う。現行毛詩の詩題は「螽斯」であるが、詩句が「螽斯羽、詵詵兮」なのである。羅振玉は詩句のまとまりを採用したことがうかがえる。

〈改編〉

・爰有樹檀→爰有樹檀／隰有六駮（秦風・晨風）

すでに趙佑や丁晏が指摘しているが、羅振玉は「爰有樹檀」から「駮」に関する記述を独立させた。

・山有栲（唐風・山有樞）／蔽芾其樗（小雅・我行其野）→山有栲

他本では独立した篇である「蔽芾其樗」の内容を「山有栲」に編入する。羅振玉は「各本誤析此爲二條。以山樗以下二十一字爲蔽芾其樗條、葉如櫟以下三十一字爲山有栲條。奪中間十七字、今據詩山有樞疏・爾雅疏引改」と注し、典拠として毛詩正義と爾雅注疏を挙げる。[30]

羅振玉は多く毛晋広要本及び丁晏校本に拠っており、基本的にはこれらの校訂を採用しているが、自叙において「明毛晉陸疏広要本・國朝王謨漢魏叢書重刻説郛本、均紕繆觸目」と、この二本の不備を批判している。

この本の特徴は、先行刊本が増補・改訂した部分をほぼすべて吸収した上、さらに倭刻本玉燭宝典や詩緝など多様な典拠に拠って五篇を新たに増補した点である。これによって、羅振玉校本は陸疏の版本のうち最も多くの篇を含む版本となった。

4. おわりに

以上、陸疏には多様な版種が存在し、それぞれ校者によって収録篇数や校訂が異なることを確認した。未だ不明な点も多いが、陸疏の刊行の概容は以下のようにいえるだろう。

まず、現存する刊本では明末の重較説郛・唐宋叢書・続百川学海に収録された版が最も古い。そして、これとほぼ同時期の本に二種の姚士麟校本がある。明刊普秘笈と塩邑志林は、同時期に同一地域で編纂されており、校者の姚士麟は両方に関与していたとみられる。明刊普秘笈本は唐陸璣撰とし、重較説郛本と篇題篇数を同じくすることから、これと同系統に位置づけら

れる。一方、塩邑志林本は篇題に若干の移動があり、撰者も異なることから、重較説郛本系とは別系統の版本あるいは写本が存在したのかもしれない。両者の関係についてはさらなる検討を要する。清刊本でこの系統に属するのは、石永齢校本（乾隆五十七年、光緒二年、光諸二十一年刊増訂漢魏叢書）と四庫全書本である。特に、乾劉五十七年刊本と光緒二年刊本は、体式や字様が重較説郛本と非常によく似ている。ただ、清刊本は、篇題を現行毛詩の詩句に一致するよう校訂を加えている。

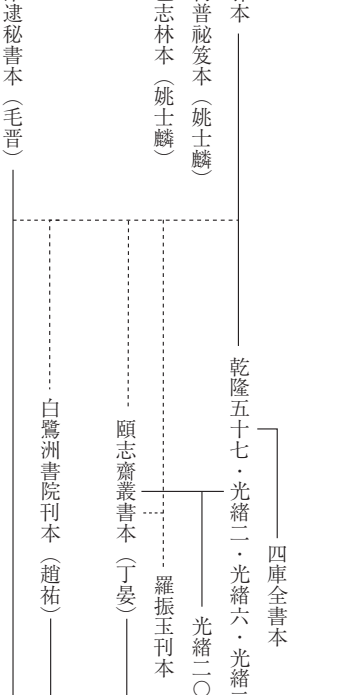
また、明末にはやや遅れて毛晋が津逮秘書に広要本を収録し刊行した。毛晋がいかなる本を用いて校勘を行ったのか定かではないが、塩邑志林の編纂に関わった胡震亨と親交があることから、姚士麟校本から何らかの影響があったことが想定される。この時期の浙江や蘇州は大蔵書家を多く輩出し、彼らは頻繁に交流して互いに批校する風があった。[31] 叢書の集成を通じて、隣接した地域で次々と別版が出版されたのは、そのような風土によるのではなかろうか。そして、毛晋広要本のように、本文の後に自身の注を附す形式は、後世清代の考証学者にも継承された。明刊本は校訂の根拠を明記しないが、清刊本では校訂の根拠だけでなく本文の出典を明記する傾向にある。このような変化には、清代考証学の影響があっただろう。

次に、清刊本のうち、乾隆後期に江西で刊行された白鷺洲書院刊本は、趙佑が重較説郛本と津逮秘書本によって校勘したものを、丁杰が覆校したものである。この本は、王謨から評価を得ているが、聚学軒叢書の中に重刻されるのみであった。

一方、広く重刻されたのが丁晏校本である。丁晏は津逮秘書本及び石永齢校漢魏叢書本を唐宋の類書と校合して校勘を行っており、釈文や斉民要術から佚篇を補った。これらの中にはすでに趙祐が補った篇目も含まれるが、丁晏が趙祐校本を参照した形跡はない。この本は、その後、古経解彙函や経学輯要の中に重刻された。光諸二〇年刊増訂漢魏叢書本も本文は丁晏校本を採用しているが、丁晏の増補と丁晏注は採らず、乾隆五十七年刊増訂漢魏叢書と同じ形式に改編している。

最後に、これら先行刊本を受けて出版されたのが羅振玉校本であり、先行刊本が行った増補改訂に加え、類書や詩注から新たに五篇を増補したことで、最も内容の多い本となった。

これらを大まかに分ければ、陸疏には二つの系統があるといえよう。一つは重較説郛本の系統であり、本文のみで校者の注を附さない本である。これは現行毛詩の詩句に沿うよう若干の



増補改訂を受けながら姚士麟校本、石永齡校本、四庫全書本と継承されていく。もう一派は毛晋広要本の系統である。これは各編に校者の校注・案語を附す形式をとり、毛詩正義などから積極的に佚文を収録している。清代には趙祐校本、丁晏校本に継承され、さらにこれらを吸収して最も内容が充実した本が羅振玉校本といえる。

陸疏は輯佚本であり、まとまった形としては現時点では明刊本までしか遡ることができない。時代が下るにつれ、数篇が増補されていくが、これらが真に原陸疏の一部であったのか検証の余地がある。また、他に未だ増補されていない佚文が存在することも想定されよう。内容の吟味の他に、陸疏には、その刊行と明末および清代中期における学問との関係、詩経学や小学との関係など問題が山積している。本稿はそのための第一歩である。

注

1　例えば、毛詩名物解（宋・蔡卞）、六家詩名物疏（明・馮復京）、続詩伝鳥名巻（清・毛奇齡）など。

2　青木正兒「名物学序説」（『中華名物考』春秋社、一九五九年）。

3　この他に清・焦循の陸氏草木鳥獸蟲魚疏疏（清・王先謙輯南菁書院叢書所収）があるが、他本とは本文の形式が異なり、独自色が強い。陳正宏先生のご助言もあり、焦循独自

の撰と見て本稿での検討の対象から外した。

4 動植物の分類方法や生態の記述の特徴については、小林清市「陸疏の素描」（『中国博物学の世界―「南方草木状」「斉民要術」を中心に』農山漁村文化協会、二〇〇三年。初出は『中国思想史研究』第九号、一九八七年）に詳しい。

5 毛詩の疏としての本書の性格を考えれば、冒頭の詩句を本文とし、続く解説を疏文とするのが妥当だが、本稿では［詩句＋疏文］のまとまりを一篇ととらえ、標題となる詩句を篇題、疏文を本文として表記する。

6 ただ、現存する本書の中には明確に爾雅郭璞注を引用した箇所はなく、本書が佚文を収集した書であることを考慮すると、小林氏（前掲論文）が指摘するように、後人の附加の可能性も考えられ、決定打とするには弱い。

7 晋書・巻五十四陸機伝「至太康末、與弟雲俱入洛、造太常張華。華素重其名、如舊相識」

8 小林氏の前掲論文の他、夏緯瑛「『毛詩草木鳥獸虫魚疏』的作者―陸機」（『自然科学史研究』第一巻第二期、一九八二年）、郝桂敏「陸機『毛詩草木鳥獸虫魚疏』有関問題研究」（『塩城師範学院学報（人文社会学報）』第三十一巻第二期、二〇一一年）、朱淵清「魏晋博物学」（『華東師範大学学報（哲学社会科学版）』第三十二巻第五期、二〇〇〇年）もこの問題について触れている。

9 倉田淳之介「『説郛』版本諸説と私見」（『東方学報』第二十五巻、一九五四年）。

10 塩邑志林は数次にわたって修が施されている。東洋文庫蔵本〈XI /3-A-7/7〉は、全十五冊のうち上帙八冊（十六種）と下帙七冊（十九種）では、同版ではあるものの、表紙や大きさが異なるため、本来は別本であったと考えられる。上帙の各冊首には「曹溶／之印」（陰刻方形朱印）「潔／躬」（陽刻方形朱印）と、明末清初、秀水の蔵書家・曹溶の印記があることから、陸疏を含む東洋文庫本の上帙は天啓の早印本と考えてよいだろう。人文研蔵本〈叢－Ⅳ－40〉は、東洋文庫本の目録の「生字符」（明・陳所学）を「顥水遺篇」（明・陳言）に作る。実際、収録されている題目は東洋文庫蔵本も人文研蔵本も「顥水遺篇」であり、「生字符」はその中の一篇である。さらに、人文研蔵本は附録として「聖門志」（明・呂元善）を附す。これには天啓七年（一六二七）の序が附されており、塩邑志林全体が少なくとも天啓

七年ごろに一度修を受けた可能性が高い。また、静嘉堂蔵本〈4103/24/35-58〉は封面に「道光戊子年春重修」とあり、道光八年（一八二八）にさらに修が加えられたことがわかる。ただし、所収の陸疏は、すべて同版であり内容の改変はないため、天啓三年刊本として扱う。

11 大木康『明末江南の出版文化』（研文出版、二〇〇四年）、一六七－一七〇頁。沈兄弟が当時著名な文人であった陳継儒の名を騙って出版したものという説もある（李斌「陳眉公著述偽目考」『学術交流』総第一三四期第五期、二〇〇五年）。

12 「此刻爲友人沈天生及其弟水部白生齋頭所藏、亦以不傳爲慮……昆季手校、授之剞劂、乞序于余。」

13 「遇我年友神廟眞臣樊端公仲子亢宗、以不受熱之氷心、懸不惹塵之神鏡、畢力在公、獨行其志。更自出其公情藻思、緝修邑乘。遂有鄉紳胡徳州孝轅、以雪操霞譔捉筆應之、已復探訪英舊遺書。別有太學姚士麟、既與徳州分挽、復與鄭茂才端胤・劉太學祖鍾、各出秘本、訂緝志林、而鄭劉亦各捐槀佐之。」

14 この地域は天啓元年（一六二一）に大火に遭っており、沈士龍・胡震亨・姚士麟が編纂した秘册匯函の板木の多くが焼失し、焼け残ったものは毛晋『津逮秘書』に入ったとされる。泰昌元年（一六二〇）の序を持つ明刊秘笈本と、天啓三年（一六二三）の樊維城序を持つ塩邑志林本は、ちょうどこの大火を挟んでおり、両者の違いにはこの大火の影響があるのかもしれない。

15 塩邑志林の出版に関わった胡震亨は、毛晋の津逮秘書にも序文を寄せている。

16 江西通志・巻十六職官表（清光緒六年刊）。

17 丁杰の名は、趙佑が発行した「白鷺洲書院示諸生」の中にも見える（白鷺洲書院志・巻四所収）。

18 聚学軒叢書本では、「屬外甥陳震亨、合鈔存之而識處尾」の一節を欠く。

19 名の伝わらない参閲者について、大木康氏は、明末の叢書を論ずる中で、彼らが実際の校正に従事した人々であり、科挙に及第できない中間知識層のアルバイトだったのではないかと想像する（大木、前掲書、一一五頁）。石永齢もおそらく、そうした知識人の一人だった可能性があろう。

20 （m）光緒二年（民国修）本と（n）光緒六年本は王謨の

識語なし。

21 朱彝尊・経義考には「姚士粦曰、予篋中有毛詩草木蟲魚疏一巻、題曰呉太子中庶子烏程令呉郡陸璣元恪撰。凡草之類八十、木之類三十有四、鳥之類二十有三、獸之類九、魚之類十、蟲之類十有八。按陳氏書録解題謂此書多引郭氏、似非呉人。若予所蔵、未嘗一條引及郭氏、且後有魯齊韓毛四詩授受、與漢書儒林傳相爲表裏」とあり、篇数以外は塩邑志林所収見只編・上編の陸疏に関する記述とほぼ同文である。

22 酒井忠夫『中国日用類書史の研究』（国書刊行会、二〇一一年）二十一－二十六頁。

23 羅振玉は「王・丁本無蜾蠃負之句。毛本有」と注す。

24 葉徳輝『書林清話』「毛氏刻書至今尚編天下。亦可見當時刊布之多印行之広矣。」

25 趙佑はそれぞれ（浸彼苞蓄）「易説卦釋文引草木疏云」、（野有死麕）「案釋文于有死麕序云麕又作麖下引草木疏云云」、（駉駉牡馬）「詩釋文引草木疏文」と注す。

26 斉民要術注には「詩義疏曰、楙、葉似柰葉、實如小　瓜、上黄似著粉香。欲啖者，截著熱灰中、令萎蔫、淨洗、以苦酒・頭汁・蜜度之、可案酒食。蜜封藏百日、乃食之、甚美」（繆啓愉校本）とあり、太平御覽は「詩義疏曰、楙、葉似榛、實如小瓜、上黄著中、令蚡香。欲噉者、蜜封、藏百日、食之也」とし、斉民要術と太平御覽では内容に異同がある。

27 各篇の丁晏注は以下の通りである。食野之芩「詩鹿鳴疏。王謨本全脱、依毛晉本補入」、浸彼苞蓄「易説卦傳釋文引毛詩草木疏」、野有死麕「詩野有死麕釋文麕又麖引草木疏。各本皆脱今補」、駉駉牡馬「詩駉釋文引草木疏。説文同。爾雅馬屬曰隲、牝曰騇。各本脱今補。」

28 「丁晏原敘」とする。

29 「薄采其茆」について羅振玉は「王・丁本作薄」と注する。「薄」に作る漢魏叢書は、丁晏校序を持つ（o）光緒二〇年刊本のみで、重較説郛本系の諸本はことごとく「言」に作る。羅振玉の序文には「光緒丙戌」（十二年）の年記があり、光緒二〇年刊の増訂漢魏叢書を参照したとは考えがたい。このことから、光緒十二年以前に丁晏校本を用いた王謨漢魏叢書本が存在した可能性があるが、確認できない。本稿ではその可能性を指摘するに留める。

30 毛詩正義「陸機疏云、山樗與下田樗畧無異、葉似差狹耳。

呉人以其葉為茗。方俗無名、此為栲者、似誤也。今所云為栲者、葉如櫟木、皮厚數寸、可爲車輻、或謂之栲櫟。許慎正以栲讀爲糗。今人言栲、失其聲耳」、爾雅注疏.釈木「陸機疏云、山樗與下田樗略無異、葉似差狹耳。呉人以其葉爲茗。方俗無名、此爲樗者似誤也。今所云爲栲者、葉如櫟木皮厚數寸可為車輻、或謂之栲櫟。許慎正以栲讀爲糗。今人言栲、失其聲耳」。

31 袁媛「常熟蔵書家与明末清初的学風」(『中国典籍与文化』二〇一五年第二期)

各本篇目比較表

		説郛（陶宗儀）	姚士麟等校	広要（毛晋參）	趙佑校	石永齡校	増訂漢魏叢書（光緒20、丁晏校）	丁晏校	羅振玉（新校正）	文淵閣四庫全書	詩経篇名
上卷	草	方秉蘭兮	方秉蘭兮	方秉蘭兮	方秉蘭兮	方秉蘭兮	方秉蘭兮	方秉蘭兮	方秉蘭兮	方秉蘭兮	鄭風溱洧
		采采芣苢	采采芣苢	采采芣苢	采采芣苢	采采芣苢	采采芣苢	采采芣苢	采采芣苢	采采芣苢	周南芣苢
		言采其蝱	言采其蝱	言采其蝱	言采其蝱	言采其蝱	言采其蝱	言采其蝱	言采其蝱	言采其蝱	鄘風載馳
		谷中有蓷	谷中有蓷	中谷有蓷	中谷有蓷	谷中有蓷	中谷有蓷	中谷有蓷	中谷有蓷	中谷有蓷	王風中谷有蓷
		集于苞杞	集于苞杞	集于苞杞	集于苞杞	集于苞杞	集于苞杞	集于苞杞	集于苞杞	集于苞杞	唐風鴇羽
		言采其薈	言采其薈	言采其薈	言采其薈	言采其薈	言采其薈	言采其薈	言采其薈	言采其薈	魏風汾沮洳
		蔦與女蘿	蔦與女蘿	蔦與女蘿	蔦與女蘿	蔦與女蘿	蔦與女蘿	蔦與女蘿	蔦與女蘿	蔦與女蘿	小雅頍弁
		有蒲與荷	有蒲與荷	有蒲與荷	有蒲與荷	有蒲與荷	有蒲與荷	有蒲與荷	有蒲與荷	有蒲與荷	陳風澤陂
		參差荇菜	參差荇菜	參差荇菜	參差荇菜	參差荇菜	參差荇菜	參差荇菜	參差荇菜	參差荇菜	周南關雎
		于以采蘋	于以采蘋	于以采蘋	于以采蘋	于以采蘋	于以采蘋	于以采蘋	于以采蘋	于以采蘋	召南采蘋
		于以采藻	于以采藻	于以采藻	于以采藻	于以采藻	于以采藻	于以采藻	于以采藻	于以采藻	召南采蘋
		言采其茆	言采其茆	言采其茆	言采其茆	言采其茆	言采其茆	薄采其茆	薄采其茆	言采其茆	魯頌泮水
		蒹葭蒼蒼	蒹葭蒼蒼	蒹葭蒼蒼	蒹葭蒼蒼	蒹葭蒼舍	蒹葭蒼蒼	蒹葭蒼蒼	蒹葭蒼蒼	蒹葭蒼蒼	秦風蒹葭
		菉竹漪漪	菉竹漪漪	菉竹猗猗	菉竹猗猗	菉竹漪漪	菉竹漪漪	菉竹猗猗	菉竹猗猗	菉竹漪漪	衛風淇奥
		苕之華	苕之華	苕之華	苕之華	苕之華	苕之華	苕之華	苕之華	苕之華	小雅苕之華
		隰有游龍	隰有游龍	隰有游龍	隰有游龍	隰有游龍	隰有游龍	隰有游龍	隰有游龍	隰有游龍	鄭風山有扶蘇
		食野之芩	食野之芩	食野之芩	食野之芩	食野之芩	食野之芩	食野之芩	食野之芩	食野之芩	小雅鹿鳴
		于以采蘩	于以采蘩	于以采蘩	于以采蘩	于以采蘩	于以采蘩	于以采蘩	于以采蘩	于以采蘩	召南采蘩
		菁菁者莪	菁菁者莪	菁菁者莪	菁菁者莪	菁菁者莪	菁菁者莪	菁菁者莪	菁菁者莪	菁菁者莪	小雅菁菁者莪
		言刈其蔞	言刈其蔞	言刈其蔞	言刈其蔞	言刈其蔞	言刈其蔞	言刈其蔞	言刈其蔞	言刈其蔞	周南漢廣
		食野之蒿	食野之蒿	食野之蒿	食野之蒿	食野之蒿	食野之蒿	食野之蒿	食野之蒿	食野之蒿	小雅鹿鳴
				食野之芩	食野之芩				食野之芩		小雅鹿鳴
		采采卷耳	采采卷耳	采采卷耳	采采卷耳	采采卷耳	采采卷耳	采采卷耳	采采卷耳	采采卷耳	周南卷耳
		贈之以勺藥	贈之以勺藥	贈之以勺藥	贈之以勺藥	贈之以勺藥	贈之以勺藥	贈之以勺藥	贈之以勺藥	贈之以勺藥	鄭風溱洧
		采葑采菲	采葑采菲	采葑采菲	采葑采菲	采葑采菲	采葑采菲	采葑采菲	采葑采菲	采葑采菲	邶風谷風
		言采其蕨	言采其蕨	言采其蕨	言采其蕨	言采其蕨	言采其蕨	言采其蕨	言采其蕨	言采其蕨	召南草蟲
		言采其薇	言采其薇	言采其薇	言采其薇	言采其薇	言采其薇	言采其薇	言采其薇	言采其薇	召南草蟲
		言采其葛	言采其葛	言采其葛	言采其葛	言采其葛	言采其葛	言采其葛	言采其葛	言采其葛	小雅我行其野
		薄言采芑	薄言采芑	薄言采芑	薄言采芑	薄言采芑	薄言采芑	薄言采芑	薄言采芑	薄言采芑	小雅采芑
		誰謂荼苦	誰謂荼苦	誰謂荼苦	誰謂荼苦	誰謂荼苦	誰謂荼苦	誰謂荼苦	誰謂荼苦	誰謂荼苦	邶風谷風
		匏有苦葉	匏有苦葉	匏有苦葉	匏有苦葉	匏有苦葉	匏有苦葉	匏有苦葉	匏有苦葉	匏有苦葉	邶風匏有苦葉
		邛有旨苕	邛有旨苕	邛有旨苕	邛有旨苕	邛有旨苕	邛有旨苕	邛有旨苕	邛有旨苕	邛有旨苕	陳風防有鵲巢
		言采其莫	言采其莫	言采其莫	言采其莫	言采其莫	言采其莫	言采其莫	言采其莫	言采其莫	魏風汾沮洳
		莫莫葛藟	莫莫葛藟	莫莫葛藟	莫莫葛藟	莫莫葛藟	莫莫葛藟	莫莫葛藟	莫莫葛藟	莫莫葛藟	大雅旱麓
		視爾如荍	視爾如荍	視爾如荍	視爾如荍	視爾如荍	視爾如荍	視爾如荍	視爾如荍	視爾如荍	陳風東門之枌
		北山有萊	北山有萊	北山有萊	北山有萊	北山有萊	北山有萊	北山有萊	北山有萊	北山有萊	小雅南山有臺
		取蕭祭脂	取蕭祭脂	取蕭祭脂	取蕭祭脂	取蕭祭脂	取蕭祭脂	取蕭祭脂	取蕭祭脂	取蕭祭脂	大雅生民
		白茅包之	白茅包之	白茅包之	白茅包之	白茅包之	白茅包之	白茅包之	白茅包之	白茅包之	召南野有死麕
		可以漚紵	可以漚紵	可以漚紵	可以漚紵	可以漚紵	可以漚紵	可以漚紵	可以漚紵	可以漚紵	陳風東門之池
		邛有旨鷊	邛有旨鷊	邛有旨鷊	邛有旨鷊	邛有旨鷊	邛有旨鷊	邛有旨鷊	邛有旨鷊	邛有旨鷊	陳風防有鵲巢
		南山有臺	南山有臺	南山有臺	南山有臺	南山有臺	南山有臺	南山有臺	南山有臺	南山有臺	小雅南山有臺

		説郛（陶宗儀）	姚士麟等校	広要（毛晋參）	趙佑校	石永齡校	増訂漢魏叢書（光緒20、丁晏校）	丁晏校	羅振玉（新校正）	文淵閣四庫全書	詩経篇名
		茹藘在阪	茹藘在阪	茹藘其阪	茹藘在阪	茹藘在阪	茹藘在阪	茹藘在阪	茹藘在阪	茹藘在阪	鄭風東門之墠
		白華菅兮	白華菅兮	白華菅兮	白華菅兮	白華菅兮	白華菅兮	白華菅兮	白華菅兮	白華菅兮	小雅白華
		蘞蔓于野	蘞蔓于野	蘞蔓于野	蘞蔓于野	蘞蔓于野	蘞蔓于野	蘞蔓于野	蘞蔓于野	蘞蔓于野	唐風葛生
		匪我伊蔚	匪我伊蔚	匪我伊蔚	匪我伊蔚	匪我伊蔚	匪我伊蔚	匪我伊蔚	匪我伊蔚	匪我伊蔚	小雅蓼莪
		隰有萇楚	隰有萇楚	隰有萇楚	隰有萇楚	隰有萇楚	隰有萇楚	隰有萇楚	隰有萇楚	隰有萇楚	檜風隰有萇楚
		芄蘭之支	芄蘭之支	芄蘭之女	芄蘭之支	芄蘭之支	芄蘭之支	芄蘭之支	芄蘭之支	芄蘭之支	衛風芄蘭
		浸彼苞稂	浸彼苞稂	浸彼苞稂	浸彼苞稂	浸彼苞稂	浸彼苞稂	浸彼苞稂	浸彼苞稂	浸彼苞稂	曹風下泉
		言采其蓫	言采其蓫	言采其蓫	言采其蓫	言采其蓫	言采其蓫	言采其蓫	言采其蓫	言采其蓫	小雅我行其野
									浸彼苞蓄		曹風下泉
									手如柔荑		衛風碩人
									四月秀葽		豳風七月
	木	梓椅梧桐	梓椅梧桐	梓椅梧桐	梓椅梧桐	梓椅梧桐	梓椅梧桐	梓椅梧桐		梓椅梧桐	鄘風定之方
									椅桐梓漆		鄘風定之方中
		有條有梅	有條有梅	有條有梅	有條有梅	有條有梅	有條有梅	有條有梅	有條有梅	有條有梅	秦風終南
		北山有栖	北山有栖	北山有栖	北山有栖	北山有栖	北山有栖	北山有栖	北山有栖	北山有栖	小雅南山有臺
		常棣	常棣	常棣	常棣	常棣	常棣	常棣	常棣	常棣	小雅常棣
		爰有樹檀	爰有樹檀	爰有樹檀	爰有樹檀	爰有樹檀	爰有樹檀	爰有樹檀 隰有六駮	爰有樹檀	爰有樹檀	小雅鶴鳴
					[補]無折我樹檀						鄭風將仲子
					[補]隰有六駮				隰有六駮		秦風晨風
		柞棫拔矣	柞棫拔矣	柞棫拔矣	柞棫拔矣	柞棫拔矣	柞棫拔矣	柞棫拔矣	柞棫拔矣	柞棫拔矣	大雅緜
		隰有杞夷	隰有杞夷	隰有杞桋	隰有杞桋	隰有杞夷	隰有杞夷	隰有杞夷	隰有杞桋	隰有杞夷	小雅四月
				隰有杜	隰有杜	隰有杜	隰有杜	隰有杜	隰有杜		唐風山有樞
		山有杜	山有杜							北山有杜	小雅南山有臺
		其灌其栵	其灌其栵	其灌其栵	其灌其栵	其灌其栵	其灌其栵	其灌其栵	其灌其栵	其灌其栵	大雅皇矣
		其檉其椐	其檉其椐	其檉其椐	其檉其椐	其檉其椐	其檉其椐	其檉其椐	其檉其椐	其檉其椐	大雅皇矣
		山有樞	山有樞	山有樞	山有樞	山有樞	山有樞	山有樞	山有樞	山有樞	唐風山有樞
		山有栲	山有栲	山有栲	山有栲	山有栲	山有栲	山有栲	山有栲	山有栲	唐風山有樞
		集于苞栩	集于苞栩	集于苞栩	集于苞栩	集于苞栩	集于苞栩	集于苞栩	集于苞栩	集于苞栩	唐風鴇羽
		無浸穫薪	無浸穫薪	無浸穫薪	無浸穫薪	無浸穫薪	無浸穫薪	無浸穫薪	無浸穫薪	無浸穫薪	小雅大東
		集于苞杞	集于苞杞			集于苞杞	集于苞杞			集于苞杞	小雅四牡
				無折我樹杞	無折我樹杞			無折我樹杞	無折我樹杞		鄭風將仲子
		其下維穀	其下維穀	其下維穀	其下維穀	其下維穀	其下維穀	其下維穀	其下維穀	其下維穀	小雅鶴鳴
		榛楛濟濟	榛楛濟濟	榛楛濟濟	榛楛濟濟	榛楛濟濟	榛楛濟濟	榛楛濟濟	榛楛濟濟	榛楛濟濟	大雅早麓
		揚之水不流束蒲	揚之水不流束蒲	揚之水不流束蒲	揚之水不流束蒲	揚之水不流束蒲	揚之水不流束蒲	揚之水不流束蒲	揚之水不流束蒲	揚之水不流束蒲	王風揚之水
		蔽芾其樗	蔽芾其樗	蔽芾其樗	蔽芾其樗	蔽芾其樗	蔽芾其樗	蔽芾其樗		蔽芾其樗	小雅我行其野
		椒聊之實	椒聊之實	椒聊之實	椒聊之實	椒聊之實	椒聊之實	椒聊之實	椒聊之實	椒聊之實	唐風椒聊
		山有苞櫟	山有苞櫟	山有苞櫟	山有苞櫟	山有苞櫟	山有苞櫟	山有苞櫟	山有苞櫟	山有苞櫟	秦風晨風
		樹之榛栗	樹之榛栗	樹之榛栗	樹之榛栗	樹之榛栗	樹之榛栗	樹之榛栗	樹之榛栗	樹之榛栗	鄘風定之方中
		摽有梅	摽有梅	摽有梅	摽有梅	摽有梅	摽有梅	摽有梅	摽有梅	摽有梅	召南摽有梅

		説郛（陶宗儀）	姚士麟等校	広要（毛晋參）	趙佑校	石永齡校	増訂漢魏叢書（光緒20、丁晏校）	丁晏校	羅振玉（新校正）	文淵閣四庫全書	詩経篇名
		食鬱及薁	食鬱及薁	六月食鬱及薁	六月食鬱及薁	食鬱及薁	食鬱及薁	食鬱及薁	六月食鬱及薁	食鬱及薁	豳風七月
		蔽芾甘棠	蔽芾甘棠	蔽芾甘棠	蔽芾甘棠	蔽芾甘棠	蔽芾甘棠	蔽芾甘棠	蔽芾甘棠	蔽芾甘棠	召南甘棠
		唐棣之華	唐棣之華	唐棣之華	唐棣之華	唐棣之華	唐棣之華	唐棣之華	唐棣之華	唐棣之華	召南何彼襛矣
		隰有樹檖	隰有樹檖	隰有樹檖	隰有樹檖	隰有樹檖	隰有樹檖	隰有樹檖	隰有樹檖	隰有樹檖	秦風晨風
		北山有枸	北山有枸	南山有枸	南山有枸	北山有枸	南山有枸	南山有枸	南山有枸	北山有枸	小雅南山有臺
		顏如舜華	顏如舜華	顏如舜華	顏如舜華	顏如舜華	顏如舜華	顏如舜華	顏如舜華	顏如舜華	鄭風有女同車
		采荼薪樗	采荼薪樗	采荼薪樗	采荼薪樗	采荼薪樗	采荼薪樗	采荼薪樗	采荼薪樗	采荼薪樗	豳風七月
		唯筍及蒲	唯筍及蒲	唯筍及蒲	唯筍及蒲	唯筍及蒲	唯筍及蒲	唯筍及蒲	唯筍及蒲	唯筍及蒲	大雅韓奕
								投我以木瓜	投我以木瓜		衛風木瓜
								食野之芩			小雅鹿鳴
								浸彼苞蓄			曹風下泉
									隰有榆		唐風山有樞
下巻	鳥	鳳皇于飛	鳳皇于飛	鳳皇于飛	鳳皇于飛	鳳皇于飛	鳳皇于飛	鳳皇于飛	鳳凰于飛	鳳皇于飛	大雅卷阿
		鶴鳴于九皋	鶴鳴于九皋	鶴鳴于九皋	鶴鳴于九皋	鶴鳴于九皋	鶴鳴于九皋	鶴鳴于九皋	鶴鳴于九皋	鶴鳴于九皋	小雅鶴鳴
		鸛鳴于垤	鸛鳴于垤	鸛鳴于垤	鸛鳴于垤	鸛鳴于垤	鸛鳴于垤	鸛鳴于垤	鸛鳴于垤	鸛鳴于垤	豳風東山
		鴥彼晨風	鴥彼晨風	鴥彼晨風	鴥彼晨風	鴥彼晨風	鴥彼晨風	鴥彼晨風	鴥彼晨風	鴥彼晨風	秦風晨風
		鴥彼飛隼	鴥彼飛隼	鴥彼飛隼	鴥彼飛隼	鴥彼飛隼	鴥彼飛隼	鴥彼飛隼	鴥彼飛隼	鴥彼飛隼	小雅采芑
		有集維鷮	有集維鷮	有集維鷮	有集維鷮	有集維鷮	有集維鷮	有集維鷮	有集維鷮	有集維鷮	小雅車舝
		關關雎鳩	關關雎鳩	關關雎鳩	關關雎鳩	關關雎鳩	關關雎鳩	關關雎鳩	關關雎鳩	關關雎鳩	周南關雎
		鳲鳩在桑	鳲鳩在桑	鳲鳩在桑	鳲鳩在桑	鳲鳩在桑	鳲鳩在桑	鳲鳩在桑	鳲鳩在桑	鳲鳩在桑	曹風鳲鳩
		宛彼鳴鳩	宛彼鳴鳩	宛彼鳴鳩	宛彼鳴鳩	宛彼鳴鳩	宛彼鳴鳩	宛彼鳴鳩	宛彼鳴鳩	宛彼鳴鳩	小雅小宛
		翩翩者鵻	翩翩者鵻	翩翩者鵻	翩翩者鵻	翩翩者鵻	翩翩者鵻	翩翩者鵻	翩翩者鵻	翩翩者鵻	小雅四牡
		脊令在原	脊令在原	脊令在原	脊令在原	脊令在原	脊令在原	脊令在原	脊令在原	脊令在原	小雅常棣
		黄鳥于飛	黄鳥于飛	黄鳥于飛	黄鳥于飛	黄鳥于飛	黄鳥于飛	黄鳥于飛	黄鳥于飛	黄鳥于飛	周南葛覃
		鴟鴞	鴟鴞	鴟鴞鴟鴞	鴟鴞鴟鴞	鴟鴞	鴟鴞	鴟鴞	鴟鴞鴟鴞	鴟鴞	豳風鴟鴞
		交交桑扈	交交桑扈	交交桑扈	交交桑扈	交交桑扈	交交桑扈	交交桑扈	交交桑扈	交交桑扈	小雅小宛
		肇允彼桃蟲	肇允彼桃蟲	肇允彼桃蟲	肇允彼桃蟲	肇允彼桃蟲	肇允彼桃蟲	肇允彼桃蟲	肇允彼桃蟲	肇允彼桃蟲	周頌小毖
				值其鷺羽	值其鷺羽			值其鷺羽	值其鷺羽		陳風宛丘
		振鷺于飛	振鷺于飛			振鷺于飛	振鷺于飛			振鷺于飛	周頌振鷺
		維鵜在梁	維鵜在梁	維鵜在梁	維鵜在梁	維鵜在梁	維鵜在梁	維鵜在梁	維鵜在梁	維鵜在梁	曹風候人
		鴻飛遵渚	鴻飛遵渚	鴻飛遵渚	鴻飛遵渚	鴻飛遵渚	鴻飛遵渚	鴻飛遵渚	鴻飛遵渚	鴻飛遵渚	豳風九罭
		弋鳧與雁	弋鳧與雁	弋鳧與雁	弋鳧與鴈	弋鳧與雁	弋鳧與雁		弋鳧與鴈	弋鳧與鴈	鄭風女曰雞鳴
		肅肅鴇羽	肅肅鴇羽	肅肅鴇羽	肅肅鴇羽	肅肅鴇羽	肅肅鴇羽	肅肅鴇羽	肅肅鴇羽	肅肅鴇羽	唐風鴇羽
		翩彼飛鴞	翩彼飛鴞	翩彼飛鴞	翩彼飛鴞	翩彼飛鴞	翩彼飛鴞	翩彼飛鴞	翩彼飛鴞	翩彼飛鴞	魯頌泮水
		流離之子	流離之子	流離之子	流離之子	流離之子	流離之子	流離之子	流離之子	流離之子	邶風旄丘
									燕燕于飛		邶風燕燕
									鶉之奔奔		鄘風鶉之奔奔
		麟之趾	麟之趾	麟之趾	麟之趾	麟之趾	麟之趾	麟之趾	麟之趾	麟之趾	周南麟之趾
		于嗟乎騶虞	于嗟乎騶虞	于嗟乎騶虞	于嗟乎騶虞	于嗟乎騶虞	于嗟乎騶虞	于嗟乎騶虞	于嗟乎騶虞	于嗟乎騶虞	召南騶虞
					[補]野有死麕						召南野有死麕
		有熊有羆	有熊有羆	有熊有羆	有熊有羆	有熊有羆	有熊有羆	有熊有羆	有熊有羆	有熊有羆	大雅韓奕

		説郛（陶宗儀）	姚士麟等校	広要（毛晋參）	趙佑校	石永齡校	増訂漢魏叢書（光緒20、丁晏校）	丁晏校	羅振玉（新校正）	文淵閣四庫全書	詩経篇名
		羔裘豹飾	羔裘豹飾	羔裘豹飾	羔裘豹飾	羔裘豹飾	羔裘豹飾	羔裘豹飾	羔裘豹飾	羔裘豹飾	鄭風羔裘
		獻其貔皮	獻其貔皮	獻其貔皮	獻其貔皮	獻其貔皮	獻其貔皮	獻其貔皮	獻其貔皮	獻其貔皮	大雅韓奕
		狼跋其胡	狼跋其胡	狼跋其胡	狼跋其胡	狼跋其胡	狼跋其胡	狼跋其胡	狼跋其胡	狼跋其胡	豳風狼跋
		教猱升木	教猱升木	毋教猱升木	毋教猱升木	教猱升木	教猱升木	教猱升木	毋教猱升木	教猱升木	小雅角弓
					[補]駉駉牡馬						魯頌駉
									野有死麕		召南野有死麕
									駉駉牡馬		魯頌駉
	魚	有鱣有鮪	有鱣有鮪	有鱣有鮪	有鱣有鮪	有鱣有鮪	有鱣有鮪	有鱣有鮪	有鱣有鮪	有鱣有鮪	周頌潛
		維魴及鱮	維魴及鱮	維魴及鱮	維魴及鱮	維魴及鱮	維魴及鱮	維魴及鱮	維魴及鱮	維魴及鱮	小雅采綠
				魚麗于罶魴鱧	魚麗于罶魴鱧		魚麗于罶魴鱧	魚麗于罶魴鱧	魚麗于罶魴鱧		小雅魚麗
		魚麗于罶魴鯉	魚麗于罶魴鯉			魚麗于罶魴鯉				魚麗于罶魴鯉	小雅魚麗
		九罭之魚鱒魴	九罭之魚鱒魴	九罭之魚鱒魴	九罭之魚鱒魴	九罭之魚鱒魴	九罭之魚鱒魴	九罭之魚鱒魴	九罭之魚鱒魴	九罭之魚鱒魴	豳風九罭
		魚麗于罶鱨鯊	魚麗于罶鱨鯊	魚麗于罶鱨鯊	魚麗于罶鱨鯊	魚麗于罶鱨鯊	魚麗于罶鱨鯊	魚麗于罶鱨鯊	魚麗于罶鱨鯊	魚麗于罶鱨鯊	小雅魚麗
		象弭魚服	象弭魚服	象弭魚服	象弭魚服	象弭魚服	象弭魚服	象弭魚服	象弭魚服	象弭魚服	小雅采薇
		鼉鼓逢逢	鼉鼓逢逢	鼉鼓逢逢	鼉鼓逢逢	鼉鼓逢逢	鼉鼓逢逢	鼉鼓逢逢	鼉鼓逢逢	鼉鼓逢逢	小雅靈臺
		成是貝錦	成是貝錦	成是貝錦	成是貝錦	成是貝錦	成是貝錦	成是貝錦	成是貝錦	成是貝錦	小雅巷伯
	虫	螽斯	螽斯	螽斯	螽斯	螽斯	螽斯	螽斯	螽斯羽	螽斯	周南螽斯
		喓喓草蟲	喓喓草蟲	喓喓草蟲	喓喓草蟲	喓喓草蟲	喓喓草蟲	喓喓草蟲	喓喓草蟲	喓喓草蟲	召南草蟲
		趯趯阜螽	趯趯阜螽	趯趯阜螽	趯趯阜螽	趯趯阜螽	趯趯阜螽	趯趯阜螽	趯趯阜螽	趯趯阜螽	召南草蟲
		莎雞振羽	莎雞振羽	六月莎雞振羽	六月莎雞振羽	莎雞振羽	莎雞振羽	莎雞振羽	六月莎雞振羽	莎雞振羽	豳風七月
		去其螟螣及其蟊賊	去其螟螣及其蟊賊	去其螟螣及其蟊賊	去其螟螣及其蟊賊	去其螟螣及其蟊賊	去其螟螣及其蟊賊	去其螟螣及其蟊賊	去其螟螣及其蟊賊	去其螟螣及其蟊賊	小雅大田
		螟蛉有子	螟蛉有子	螟蛉有子 蜾蠃負之	螟蛉有子 蜾蠃負之	螟蛉有子	螟蛉有子	螟蛉有子	螟蛉有子 蜾蠃負之	螟蛉有子	小雅小宛
		蟋蟀在堂	蟋蟀在堂	蟋蟀在堂	蟋蟀在堂	蟋蟀在堂	蟋蟀在堂	蟋蟀在堂	蟋蟀在堂	蟋蟀在堂	唐風蟋蟀
		蜉蝣之羽	蜉蝣之羽	蜉蝣之羽	蜉蝣之羽	蜉蝣之羽	蜉蝣之羽	蜉蝣之羽	蜉蝣之羽	蜉蝣之羽	曹風蜉蝣
		如蜩如螗	如蜩如螗	如蜩如螗	如蜩如螗	如蜩如螗	如蜩如螗	如蜩如螗	如蜩如螗	如蜩如螗	大雅蕩
		伊威在室	伊威在室	伊威在室	伊威在室	伊威在室	伊威在室	伊威在室	伊威在室	伊威在室	豳風東山
		蠨蛸在戶	蠨蛸在戶	蠨蛸在戶	蠨蛸在戶	蠨蛸在戶	蠨蛸在戶	蠨蛸在戶	蠨蛸在戶	蠨蛸在戶	豳風東山
		碩鼠	碩鼠	碩鼠	碩鼠	碩鼠	碩鼠	碩鼠	碩鼠	碩鼠	魏風碩鼠
		如鬼如蜮	如鬼如蜮	爲鬼爲蜮	爲鬼爲蜮	如鬼如蜮	如鬼如蜮	如鬼如蜮	爲鬼爲蜮	如鬼如蜮	小雅何人斯
		卷髮如蠆	卷髮如蠆	卷髮如蠆	卷髮如蠆	卷髮如蠆	卷髮如蠆	卷髮如蠆	卷髮如蠆	卷髮如蠆	小雅都人士
		胡爲虺蜴	胡爲虺蜴	胡爲虺蜴	胡爲虺蜴	胡爲虺蜴	胡爲虺蜴	胡爲虺蜴	胡爲虺蜴	胡爲虺蜴	小雅正月
		領如蝤蠐	領如蝤蠐	領如蝤蠐	領如蝤蠐	領如蝤蠐	領如蝤蠐	領如蝤蠐	領如蝤蠐	領如蝤蠐	衛風碩人
								弋鳧與鴈			鄭風女曰雞鳴
								野有死麕			召南野有死麕
								駉駉牡馬			魯頌駉